

はじめに

本テキストは、皆さんが無理なく基本をマスターし、かつ応用力を養成できるように編集してあります。

単元ごとに、知識の確認のための基本事項とプラスα、それを定着させるための例題があり、さらに問題を解く力を確実にするために、演習問題Aと演習問題Bが段階を追って配列してあります。また、分からない問題がでてきたら、すぐに基本事項や例題に戻って、新出の文法・用語などを確認し、その使い方を見ることが出来ます。

古典は知識の積み重ねが不可欠な教科です。本テキストの学習を通じ、基本事項の利用法と正解へのプロセスを体得し、実力を確かなものとされることを願っています。

構成と活用法

本テキストは、次のように構成されています。

▼基本事項 各単元のポイントを、簡潔な説明で示しています。

▼プラスα 基本事項に盛り込めなかった重要事項も示してあります。

▼例題 基本事項で学んだ文法事項を短文で集中的に出題しています。

▼演習問題A 基礎力の再確認を目的としています。解けた場合も、そうでない場合も、正解に至るまでの過程を必ず確認しましょう。

▼演習問題B 長文問題を通しての、応用力の養成を目的としています。基本事項・例題で学んだ文法・用語をどのように活用してい

けばよいかを考えながら、問題に向かうと効果的です。

◆ もくじ — 古典 I

1 助動詞(3) — 過去・完了	2
2 助動詞(4) — 使役・尊敬、受身・尊敬・自発・可能	8
3 助詞 — 副助詞・終助詞・間投助詞、副詞の呼応	14
4 敬語	20
プラスα 紛らわしい語の識別	26
付録 — 文語文法要覧	28

基本事項

き・けり [接続] 活用語の連用形に接続する。「き」は力変動詞・サ変動詞の未然形にも付く。

[活用]

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
き	特殊型	(せ)	○	き	し	しか	○
けり	ラ変型	(けら)	○	けり	ける	けれ	○

[意味]

「き」 過去(〜タ) 直接体験(〜タ)

「けり」 ①過去(〜タ) 伝聞した過去(〜タソウダ) ②詠嘆(〜タツタノダ、〜(ダ) ナア)

つ・ぬ [接続] 活用語の連用形に接続する。

[活用]

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
つ	下二段型	て	て	つ	つる	つれ	てよ
ぬ	ナ変型	な	に	ぬ	ぬる	ぬれ	ね

[意味]

①完了(〜シテシマッタ、〜タ) ②強意(キツト〜、〜シテシマウ)

たり・り [接続] 「たり」「り」は活用語の連用形に接続する。

「り」は四段の已然形とサ変の未然形(サ変・四段の命令形という説もある)に接続する。

[活用]

基本形	活用	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
たり	ラ変型	たら	たり	たり	たる	たれ	(たれ)
り	ラ変型	ら	り	り	る	れ	(れ)

[意味]

①完了(〜タ) ②存続(〜テイル)

ポイント

▽「き」は話し手(作者)が直接体験した過去を述べる場合に用いられ、「けり」は伝聞した過去の事実を述べる場合に用いられるという違いがあるが、厳密に区別されているわけではなく、例外的用例もある。

▽「けり」が詠嘆の意味で用いられるのは、和歌や会話文中であることが多い。

▽「つ」「ぬ」が強意を表す場合は、後に推量の助動詞が付くことが多い。

つ↓てむ・つべし・つらむ・てまし
ぬ↓なむ・ぬべし・ぬらむ・なまし

▽「たり・り」の〈完了〉と〈存続〉の意味の違い。

〈完了〉 何かが終わった状態を表す。

〈存続〉 ある状態が起こり、継続していることを表す。

▽〈完了〉と〈存続〉の意味の識別は、まず、存続の意味で確認してみるとよい。存続の「〜テイル」を当てはめてみて、意味が通れば存続。それで通らなければ完了の意味を当てはめて確認する。

例題

1 次の（ ）の中の動詞を適切な形に活用させよ。

- (1) 花見に(行く)き。 (2) 花見に(行く)けり。 (3) 花見に(行く)つ。
 (4) 花見に(行く)ぬ。 (5) 花見に(行く)たり。 (6) 花見に(行く)り。

2 次の（ ）の中の助動詞を適切な形に活用させよ。

- (1) 花見をせ(き)時 (2) 花見をし(けり)時 (3) 花見をし(つ)時
 (4) 花見をし(ぬ)時 (5) 花見をし(たり)時 (6) 花見をせ(り)時
- (1) (2) (3) (4) (5) (6)

3 次の傍線部の「けれ」を文法的に説明せよ。

- (1) 桜の散りけるを見てこそ詠みけれ。
 (2) あやしうこそものぐるほしけれ。

4 次の文中から完了の助動詞を抜き出し、活用形を記せ。

- (1) この男かいま見てけり。
 (2) 限りなく遠くも来きにけるかな。
 (3) 舟子、かちとりは、舟唄うたひて何とも思へらず。
 (4) おほかたみな荒れたれば、あはれとぞ人々言ふ。

- (1) (2) (3) (4)

ポイント

1 助動詞の接続の問題。「行く」はカ行四段動詞で、「行か・行き・行く・行く・行け・行け」と活用する。

2 助動詞の活用の問題。「時」は名詞Ⅱ体言なので連体形の活用によい。

3 「けれ」の直前に注目。

4 助動詞は接続(上に来る語から判断)と活用形(下に来る語から判断)の両方を確認して抜き出していく。

1 次の傍線部の「し」の文法的説明として最も適切なものを、後のア～コの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。ただし、同じ記号を何度用いてもよい。

- (1) 歌よむといはれし末々
- (2) 題出だして、女房にも歌よませたまふ。
- (3) それが子なればなど言はればこそかひあるこちもし侍らめ。
- (4) 元輔が後といはるる君しもや今宵の歌にはづれてはをる
- (5) 別れ惜しみて、かしこの漢詩作りなどしける。
- (6) 富士の山は……わが生ひいでし国にては、西面に見えし山なり。

- ア 強意の副助詞 イ 接続助詞 ウ 過去の助動詞 エ サ行四段動詞
 オ サ変動詞 カ 接続助詞の一部 キ 副詞の一部 ク 形容詞の一部
 ケ サ行四段動詞の一部 コ サ変動詞の一部

(1) _____ (2) _____
 (4) _____ (5) _____
 _____ (3) _____
 _____ (6) _____

2 次の傍線部の「けり」のうち、過去の助動詞を選べ。また、その中から詠嘆の意味を表すものを選べ。

- (1) 人はいさ心も知らずふる里は花ぞ昔の香に匂ひける
- (2) 男こそいといとほしけれ。
- (3) 馬にけられて歩けずなりぬ。
- (4) 桜の散りはべりけるを見て詠めり。
- (5) うちうたひたるこそ、いと心うけれ。
- (6) 今は昔、竹取の翁といふものありけり。

過去の助動詞

詠嘆の意味

現代語訳

- 1 (1) 歌を詠むと言われた人の子や孫たち
 (2) 歌の題を出して、女房たちにも歌を詠ませなさる。
 (3) 「その人の子であるから」などと言われたならば甲斐のある心地もするであろうが。
 (4) 清原元輔のあとをつぐものと言われるあなたなのに今晚の歌会にはづれているか
 (5) 別れを惜しんで、あそこの(国の歌である)漢詩を作ったりなどしたということである。
 (6) 富士の山は……私が成長した国では、西の方向に見えた山である。

2

- (1) 人はさあどうだかわからない。昔よく行った所では、梅の花は昔のまま匂っていることだなあ
 (2) 男はとても気の毒である。
 (3) 馬に蹴られて歩けなくなってしまうた。
 (4) 桜が散りましたのを見て詠んだ。
 (5) ふとうたっているのは、まったく不快だ。
 (6) 今は昔、竹取の翁というものがいたのであった。

③ 空欄 a・b には完了の助動詞「つ」、c には「ぬ」、d・f には「たり」または「り」を、それぞれ適切な形に活用させて記せ。

- (1) 帝御覧^{みかど}じて、みそかに召し a けり。
 (2) このことかのこと怠^{じやう}らず成^{じやう}し b けり。
 (3) 限りなく遠くも来 c けるかな。
 (4) このもとの女、悪^あしと思へ d 気色もなし。
 (5) おもしろく咲き e 花を長く折る。
 (6) 撫子^{なでしこ}にぞいとよく似 f 。

_____ (1) _____
 _____ (2) _____
 _____ (3) _____
 _____ (4) _____
 _____ (5) _____
 _____ (6) _____

④ 次の(1)～(4)の傍線部の助動詞の文法的意味と、ここでの活用形を記せ。

- (1) 立ちぬ。
 (2) 立たぬ時
 (3) 立たねども
 (4) 立ちね。

_____ (1) _____
 _____ (2) _____
 _____ (3) _____
 _____ (4) _____

⑤ 次の(1)～(4)の傍線部の助動詞の文法的意味と、ここでの活用形を記せ。

- (1) 風波やまねば、なほ同じ所にとまれり。
 (2) はや船出して、この浦を去りね。
 (3) そのほどのいみじさ、推し量られぬべし。
 (4) 秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる

_____ (1) _____
 _____ (2) _____
 _____ (3) _____
 _____ (4) _____

③ (1) 帝が御覧になって、こっそりとお呼びになった。

- (2) このことやあのことを怠ることなく成しとげた。
 (3) このうえなく遠くに来てしまったことだなあ。

- (4) この以前からの女は、ひどいと思つている様子もない。
 (5) 趣深く咲いている花を長めに折る。
 (6) 撫子にとてもよく似ている。

④ (1) 立った。

- (2) 立たない時
 (3) 立たないが
 (4) 立ってしまえ。

⑤ (1) 風や波がやまないの、やはり同じ場所にとどまっている。

- (2) すぐに船を出して、この海岸を去りなさい。
 (3) その時のすばらしさは、きっと推し量れるだろう。
 (4) 秋が来たと目にははっきりと見えませんが、風の音ではっと気がつくことだ

① 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

月にはかられて、夜深く起きに^①けるも、思ふらむところいとほしけれど、たち帰らむも遠きほどなれば、やうやうゆくに、小家などに例おとなふものも聞えず、くまなき月に、ところどころの花の木どもも、ひとへにまがひぬべくAかすむ^②たり。いま少し、過ぎて見Bつ所よりも、おもしろく、過ぎがたき心地して、

そなたへと行きもやられず花桜にほふ木蔭に旅だたれつつ

とうち誦じて、「はやく、ここにもの言ひCき人あり」と思ひ出でて、立ちやすらふに、築地のくづれより、白きものの、いたくしはぶきつつ出づめり。あはれげに荒れ、人けなき所なれば、ここかしこのぞけど、とがむる人なし。

問一 傍線部①と同じ意味の助動詞を含む文を次のA～Eの中から一つ選び、記号で答えよ。

A 犬を蔵人二人して打ち給ひては、死ぬべし。

I 沖漕ぐ船を辺に寄せむ風も吹かぬか波たたずして。

ウ うら悲し春し過ぐればほととぎすいやしき鳴きぬ、

E 人離れたる所にぞうちとけて寝ぬる。

問二 傍線部②と同じ意味の助動詞を含む文を次のA～Eの中から一つ選び、記号で答えよ。

A たなばた祭るこそ、なまめかしけれ。

I 木の葉より漏り来る月のかげみれば心づくしの秋は来にけり

ウ 今は昔、薬師寺の別当僧都といふ人ありけり。

E 冬枯れのけしきこそ、秋にはさをさをさ劣るまじけれ。

問三 [] A～Cの語を活用させよ。

A かすむ

B つ

C き

①

出典

「堤中納言物語」

平安時代後期の成立、短編物語集。「花桜折る少将・このついで・虫めづる姫君・ほどの懸想・逢坂越えぬ権中納言・貝合はせ・思はぬ方にとまりする少将・はなだの女御・はいずみ・よしなしごと」の十編の短編物語と一編の断章が収められている。

重要古語

- ◇ はかられて Ⅱ だまされて。
- ◇ いとほしけれど Ⅱ 気の毒ではあるけれど。
- ◇ 例 Ⅱ ふだん。
- ◇ おとなふ Ⅱ 音がする。
- ◇ くまなき Ⅱ 曇りのない。
- ◇ まがひぬべく Ⅱ 見間違えてしまいそうに。
- ◇ しはぶきつつ出づめり Ⅱ 咳をしながら出て来るようだ。

ヒント

問一 本文の「に」は完了の助動詞。完了の助動詞は「つ・ぬ・たり・り」の四つ。

問二 本文の「けり」は過去の助動詞。接続(上に来る語)をしっかりと見抜くこと。

問三 活用のある語の語形は、下に来る語によって決まる。B・Cの助動詞は接続に注意する。

② 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

継母まははなりし人Aは、宮仕へせしがくだりしCなれば、思Dひしにあらぬ①ことどもなどありて、世中よのなかうらめしげにて、ほかにわたるとて、五つばかりなる児ちこどもなどして、「あはれなりつる心のほどなむ、わすれむ世あるまじき」などいひて、梅の木の、つまちかくて、いとおほきなるを、「これが花のさかむ折りは来むよ」と言ひおきてわたりぬるを、心の内に、こひしくあはれなりと思ひつつ、しのびねをのみ泣きて、その年もかへりぬ③。いつしか梅さかなむ。来むとありしを、さやあると、目をかけてまちわたるに、花もみなさきぬれ④ど、音もせず。思ひわびて、花を折りてやる。

たのめしGを猶なほやまつべき霜Hがれし梅をも春はわすれざりけり⑤
 といひやりたれば、あはれなることどもかきて、
 猶たのめ梅の立枝たちえはちぎりおかぬ⑥おもひのほかの人もとふなり

(注) ○継母 作者の父孝標の妻として共に東国に下ったが、帰京後、離別した。 ○つま 邸宅の軒端。

問一 波線部 A～H の「し」のうち、文法的性質が他と異なるものを一つ選び、記号で答えよ。

問二 傍線部 ①・③・④・⑥ の「ぬ」を文法的に説明せよ。

問三 傍線部 ② を誰が「あはれなり」なのかを明確にして現代語訳せよ。

問四 傍線部 ⑤ を「誰が誰に」を明確にして現代語訳せよ。

②

出典
「更級日記」

平安時代後期の成立。作者は菅原孝標すがわらのたかすのむすめ女。作者の二三歳から五〇代半ばまでの約四〇年間の人生を、晩年になってから回想して記したもの。

重要台語

- ◇世中 夫婦仲。
- ◇うらめしげにて うまくいかず。
- ◇ほかにわたる 離別してよそへ行く。
- ◇しのびねをのみ泣きて 人知れず泣いてばかりいるうちに。
- ◇さかなむ 咲いてほしい。
- ◇さやあると 本当にそうなのだろうか。
- ◇春はわすれざりけり 春は忘れずにやって来て梅の花を咲かせたのに。
- ◇おもひのほか 思いもかけない。
- ◇とふ 訪れる。

UNT

- 問一 過去の助動詞「き」の接続を確かめてみる。
- 問二 「ぬ」の識別でカギになるのは打消か完了かということ。
- 問三 誰の会話文なのかをとらえて、「あはれなり」の主語をつかむ。
- 問四 誰と誰が歌のやりとりをしているのか。初めの歌を送ったのは誰で、それに対する返事の歌を送っているのは誰か。